

1. 京田辺市堀切7号墳出土埴輪の再整理

吉永 健人

1. はじめに

堀切古墳群は京田辺市薪堀切谷・里ノ内に所在する群集墳で、消滅墳も含め、11基の円墳（横穴式石室）と10基の横穴墓がこれまでの調査で確認されている。京都府立大学文学部考古学研究室ではこれまで、京田辺市史編さん事業の一環として堀切古墳群の出土資料の再検討をおこなってきた（田口ほか 2020、諫早ほか 2021、岡田ほか 2021、諫早・藤川ほか 2023、諫早・守田ほか 2023）。本稿では、堀切7号墳出土の埴輪を再整理した成果を報告する。

2. 概要

(1) 古墳の概要

堀切古墳群は、甘南備山（標高 221m）の山麓から北東方向にのびる東西2つの丘陵上、約



図1 堀切7号墳分布図（田辺町教育委員会 1989 に加筆）

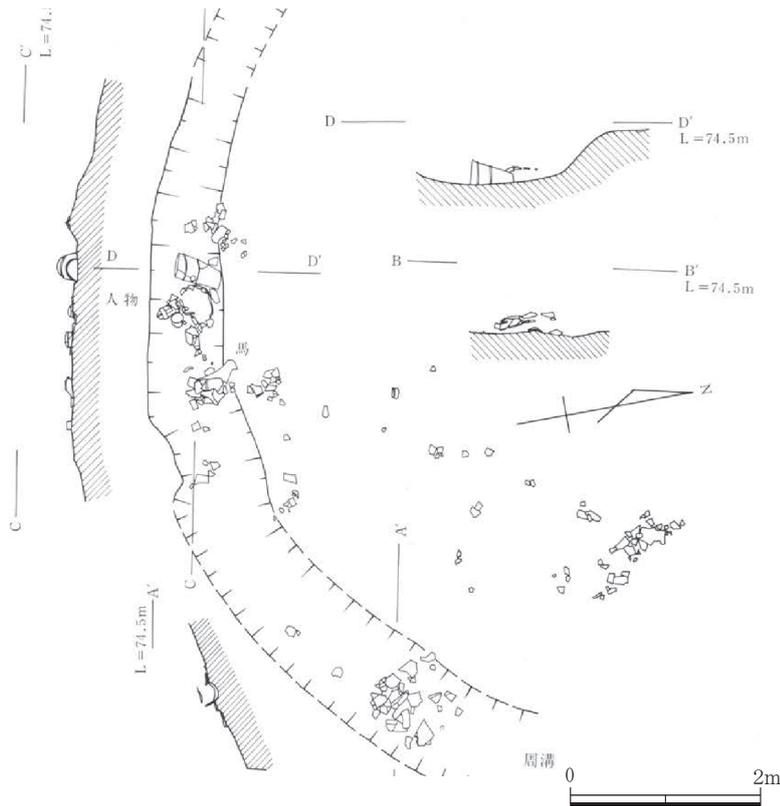


図2 堀切7号墳遺構図（田辺町教育委員会 1989 に加筆）

0.4km 四方の範囲に形成されている（図1）。1978～1979年に薪小学校建設に伴い、発掘調査がおこなわれることとなった（田辺町教育委員会 1989、以下「調査報告書」）。7号墳のある位置は、発掘当時すでに削平によりマウンドがなくなっており、古墳の存在は想定されていなかったが、周溝の一部が検出されたことにより、新たにその存在が認識されるに至った。墳丘のおよそ2/3が削平され、主体部は不明である。北・南側で検出された周溝は、それぞれ隣接する4号墳・8号墳のそれらと重複・併用されており、周溝の内周から、7号墳は直径約15mの円墳に復元されている（図2）。その周溝埋土内で多数の埴輪が確認されており、北側周溝では円筒埴輪片が、南側では比較的遺存状態の良い円筒埴輪や、人物埴輪や馬形埴輪といった形象埴輪、須恵器器台が出土した。

（2）資料の概要

堀切7号墳で出土した埴輪については、一部遺存状態の良い資料は接合復元され、調査報告書内で実測図とともに報告されている。その他の埴輪片は、17箱分のコンテナに保管されていた。復元された個体のうち、一部は現在京田辺市史編さん室内の展示室で展示され、そのうち武人埴輪については京田辺市指定文化財に指定されている。

今回、京田辺市史編さん事業の一環として、当古墳出土埴輪を再整理し、未報告資料を含めて観察・実測をおこなったので、その成果を以下に報告する。また、今回の調査では三次元計測を活用した図化作業をおこなっており、それらの成果については別稿にて報告予定である。

3. 堀切7号噴出土埴輪

(1) 円筒埴輪 (図3～6) ⁽¹⁾

1は2条3段の円筒埴輪である。器高約52cm、口径約35cm、底径約27cm。口縁部高15.3cm、突帯間隔12.6cm、底部高24.6cm。2段目に径約6cmの円形透孔がへら状の工具で2孔穿たれている。2条ある突帯のうち、上の突帯は上稜がシャープで、断面M字状を呈する。下の突帯は中央の凹みがやや浅く、突帯上面が胴部器壁に対して垂直でなく、なだらかに取り付く。口縁部は端部を外反気味に仕上げる。外面はタテハケ後に回転性の強いヨコハケを施すが、他の個体に比べてタテハケが見えている割合が高い。1次調整のタテハケは上から1段目はやや右上がりに、2段目以下は左上がりに施されている。内面は横方向のハケ後、突帯付近を中心にナデる。また、断面では確認できないが、2段目上部付近に器壁がやや湾曲する箇所があり、この付近で底部を倒立したものと推測される。

2は上から3段目まで残存する。口径約36cm、口縁部高14.7cm、突帯間隔11.1cm。上から2段目にへら状工具によって円形透孔が2孔穿たれる。突帯は断面M字状を呈するが、他の資料に比べて比較的低平である。口縁部はゆるやかに外方に開き、端部は単純におさめる。外面は1次調整タテハケ後に回転性の強いヨコハケ。ヨコハケは、器面にわずかな段差が生じるほど工具を強く押し当てて施されている。内面はナデ。内面には一方の透孔の横に「×」のへら記号が刻まれている。また、上から1条目の突帯付近の内面には、粘土紐の接合痕が多く残っている。この付近を境に、上下で粘土紐の接合が上部は内傾接合、下部は外傾接合となっており、この付近が倒立位置と考えられる。

3は上から4段目までが残存する。口径約30cm。口縁部高11.4cm、突帯間隔は上から2段目が10.3cm、3段目が7.0cm。上から3・4段目に円形透孔がそれぞれ2孔ずつ直交する向きに穿たれる。突帯は強くナデられて稜が鋭く、断面がM字状になる。口縁部は直立する。外面はタテハケ後に回転性の強いヨコハケ。内面はナデ。上から1条目の突帯下方付近が外にやや膨らんでいることから、この付近が倒立位置である可能性がある。

4は上から4段目までが残存する。口径約33cm。口縁部高9.6cm、突帯間隔は上から2段目が9.2cm、3段目が8.6cm。上から3・4段目に円形透孔がそれぞれ2孔ずつ穿たれるが、完全な直交方向ではなくやや向きにズレが生じている。突帯は指で強くナデられ、中位は凹線状に凹む。内面はナデ。上から1条目の突帯下方付近が外にやや膨らんでいること、それ以下の粘土紐が外傾接合となっていることから、この付近が倒立位置である可能性が高い。

5は2条3段の円筒埴輪だが、大きく焼け歪んでいる。本来は器高約50cmの埴輪として製作されたものと考えられ、焼成時に縦方向に裂けるように割れ大きく歪んでしまっている。他の円筒埴輪に比べて硬質に焼き上がっており、焼き回りの違いにより、橙～灰紫系の色調を呈する。口縁部高は10.2cm、突帯間隔は11.7cm、底部高は26.0cm。2段目に円形透孔が2孔穿たれており、その透孔から横に伸びるように「＝」状のへら記号が外面に刻まれている。突帯は断面M字状になるように強くナデられる。口縁部はほぼ直立する。外面はタテハケ後に回転性の強いヨコハケ。内面はナデ。

6～10は口縁部から胴部にかけてが残存する。口径が30cmを超えるやや大ぶりのもの(6・

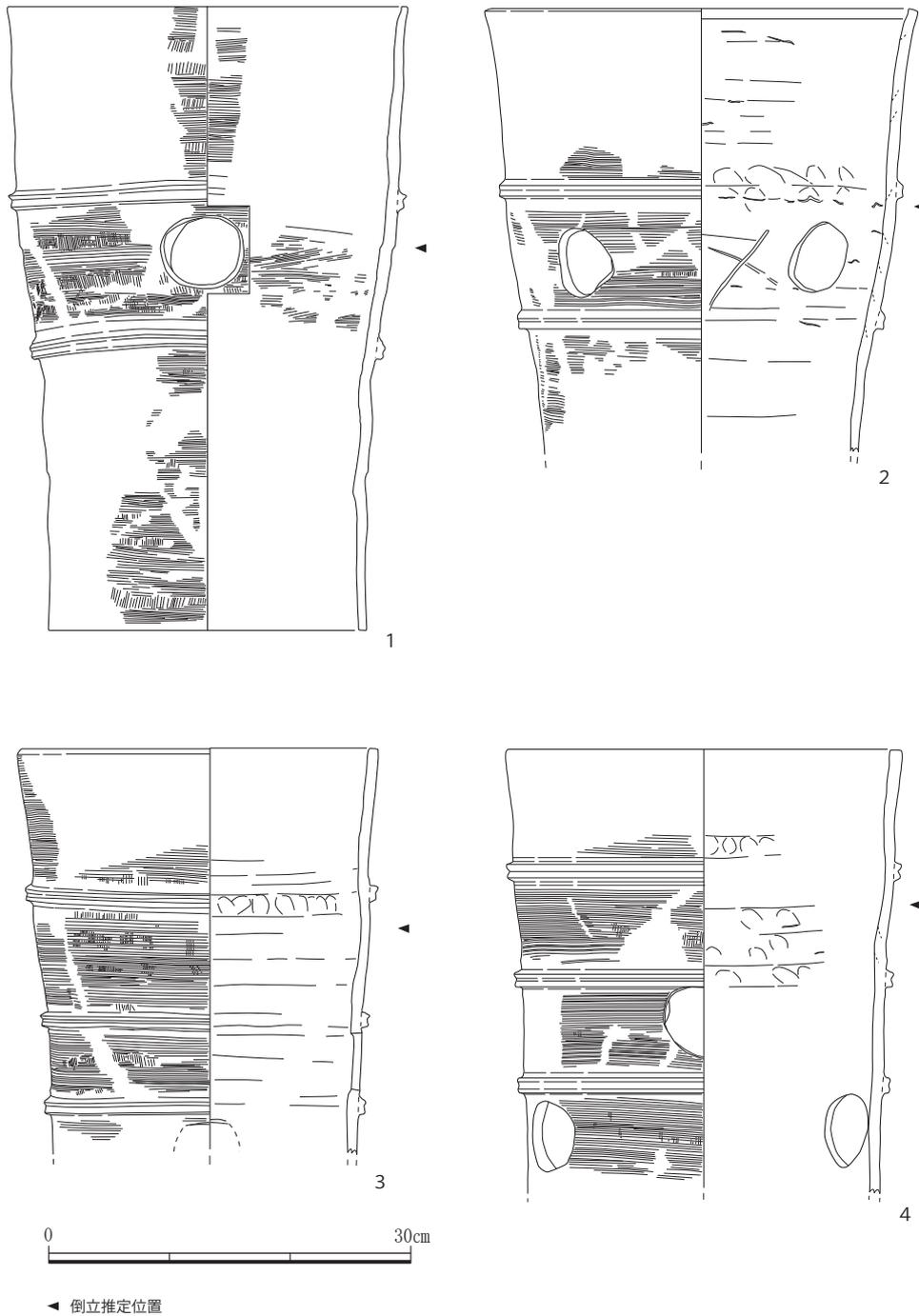


図3 堀切7号墳出土土円筒埴輪(1) (S=1/6)

7)と30cm未満の小ぶりのものがある(8~10)。後者の一群については、口縁部高が約11cmのもの(8・9)と、約9cmのもの(10)がある一方、前者の一群は、正確な口縁部高はわからないが、その残存状況から15cm以上となるようである。突帯はいずれも稜が鋭く、断面M字状を呈する。口縁部には、6・9のように外反するタイプと、7・8・10のように直立するタイプがある。9には上から2段目に円形透孔が穿たれる。外面は、いずれもタテハケ後に回転性の強いヨコハケが施される。内面はナデによる調整が多いが、6のみヨコハケが認められる。

11~22は胴部である。胴部径は25~35cmと幅があるが、30cmを超える大ぶりな一群と、

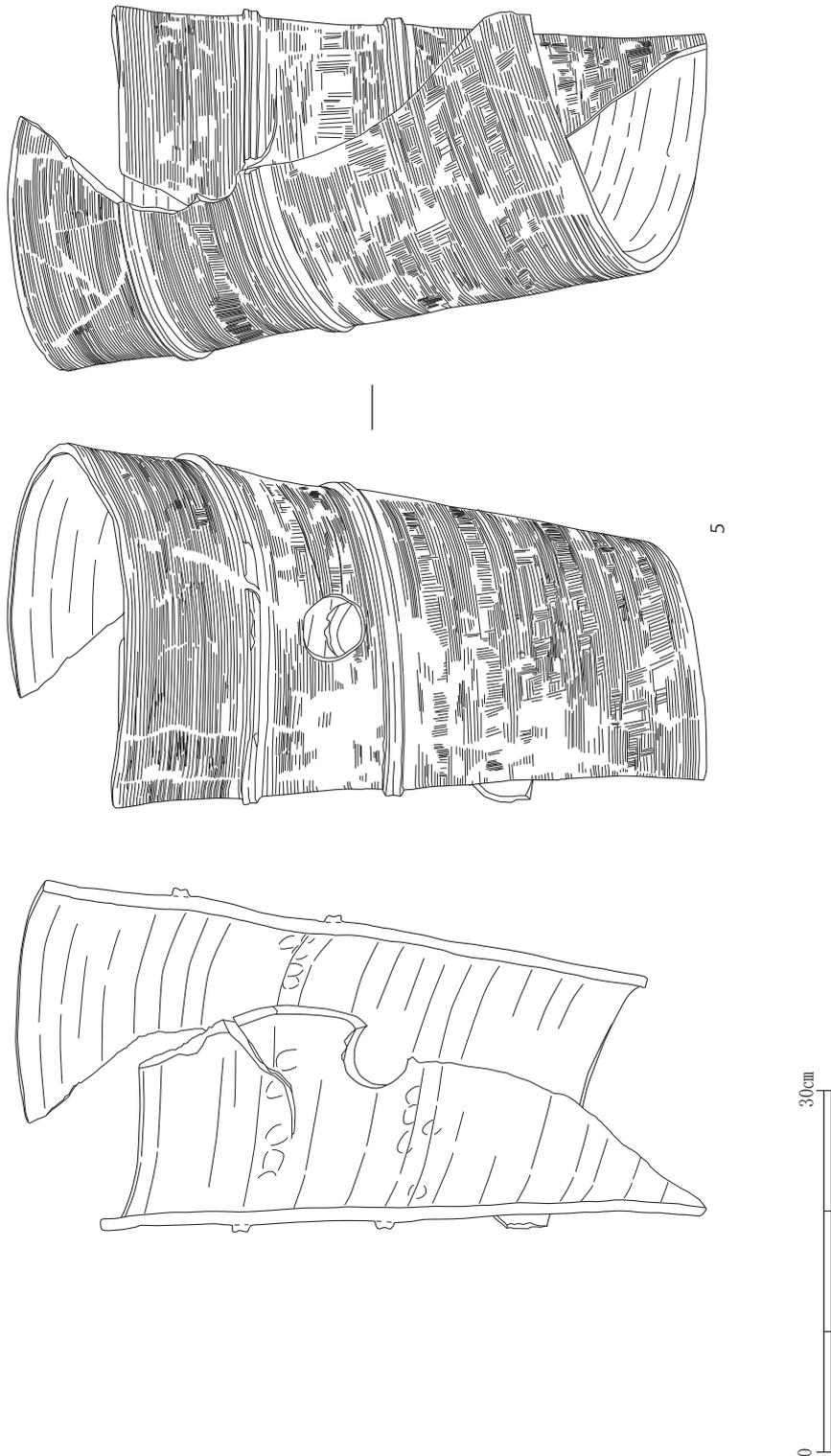
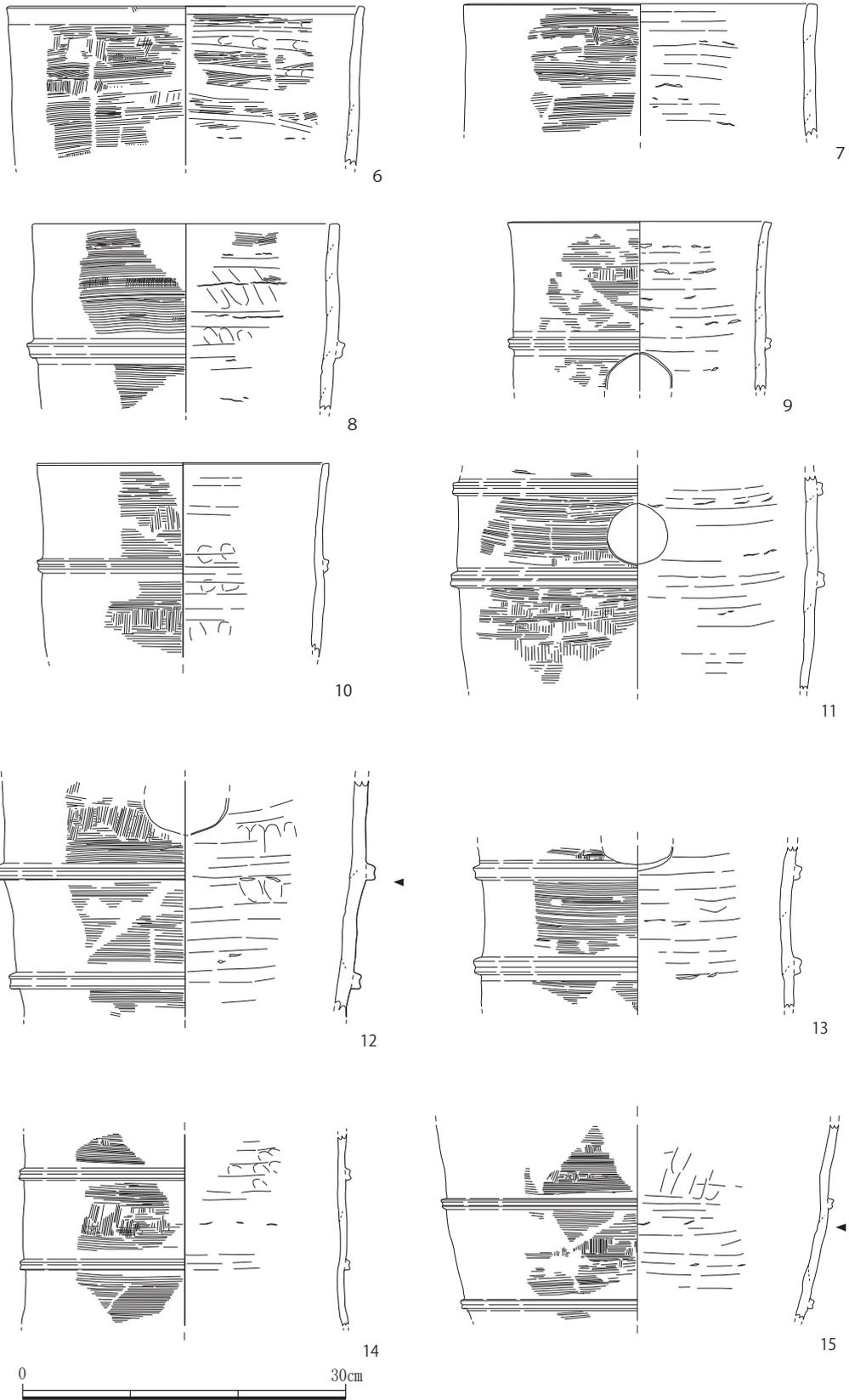


図4 堀切7号墳出土円筒埴輪(2) (S=1/6)

約25cmの小ぶりな一群に大別できる。突帯間隔には、約8.5cm(11・13・14)、9.4cm(15)、10.0cm(12)、10.7cm(16)を測るものがある。突帯はいずれも断面M字状を呈し、中央は凹線状に凹む。外面はタテハケ後に回転性の強いヨコハケを施す。一方、12にはヨコハケ後にタテハケをおこなっている部分があり、この付近が粘土紐の積み上げ単位もしくは乾燥単位の境で



◀ 倒立推定位置

图5 堀切7号墳出土土円筒埴輪 (3) (S=1/6)

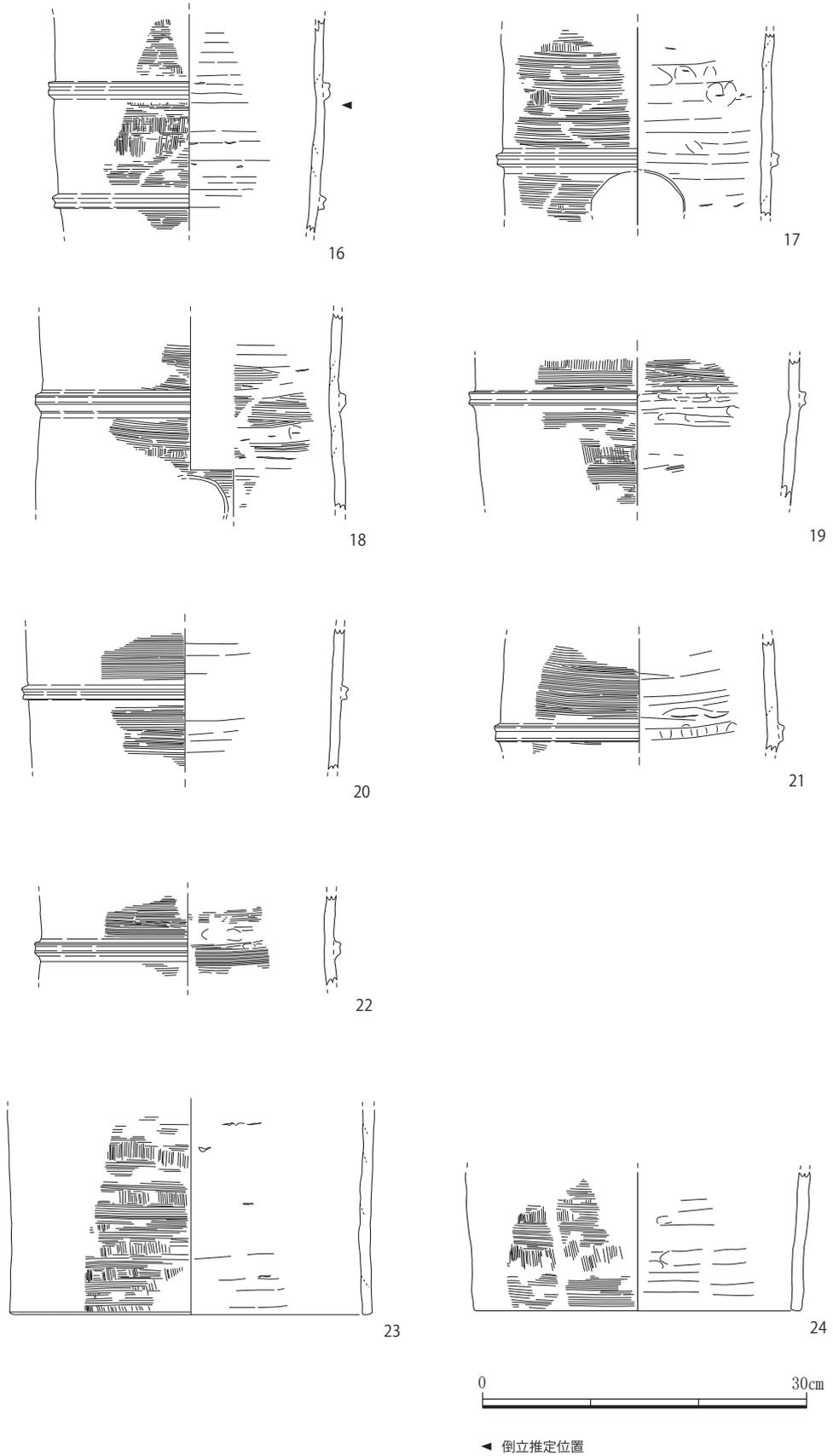


図6 堀切7号墳出土土円筒埴輪(4) (S=1/6)

あった可能性が高い。断面や内面の観察から、粘土紐の接合の傾きが逆転することが確認できるものには、突帯と同じ高さや、突帯やや下方の位置のものが認められる（12・15・16）。

23・24は底部である。底径はいずれも約30cm。突帯が残存していないため、底部高は不明。外面タテハケ調整後に回転性の強いヨコハケを施し、内面はナデで仕上げる。底端部は直立するようにおさめる。断面や内面の観察から、粘土紐の接合は外傾していることがわかる。

他に、残存状況が悪く実測できていないが、朝顔形埴輪の可能性が高い破片も確認できた。

（2）形象埴輪（図7～12）

25は頭部から上半身が残る人物埴輪である。27と同様、須恵質に焼き上がっている。頭部には冠帽や髪の実表現はない。顔は丸顔で球形に近い。目は全形がわからないが、やや吊り目気味にくり抜かれている。口も上半部しかわからないが、横長の楕円状にくり抜かれる。鼻は鼻先が「山」字状に開き、鼻筋が真っ直ぐ伸びる。鼻孔はない。側頭部には約2cmのボタン状の粘土を貼り付け、耳を表現する。耳孔はない。顎は粘土を尖らせるように整形して表現する。体部は衣服の実表現がない。体部外面はハケで調整する。左腕は肩から欠損しており、右腕は手先が欠損する。右腕は前方に突き出し、中実で作られているようである。肩から腰にかけてくびれ、残存部の最下端には横方向の擦痕のようなものが確認できることから、この付近が腰部との境になる可能性がある。

26は頸部から下半身までが残る人物埴輪である。25・27とは異なり、土師質焼成で明橙色を呈する。上半身には衣服の実表現が認められない。外面調整は摩滅により判然としないが、ナデと考えられる。右腕は欠損する。左腕は横に伸ばすが、身体全体に対して腕が極端に短い。手首付近から扇状に開き、先端には指と思われる表現も認められる。肩から腰にかけては、逆三角形の体型になるように極端にくびれる。腰には幅2cm前後の帯を締めており、表面には連続する斜交文が表現される。帯の下はスカート状に成形しており、外面にはわずかにヨコハケが残る。

27は人物埴輪である。ほぼ全形の様相がわかる残存状態の良好な資料である。極めて硬質に焼けており、灰紫系の色調を呈する。腰以下の下半身は表現されず円筒状の基部とする。

頭部には山状の冠帽表現があり、頭頂部まで成形、ハケ調整をおこなった後に、頂部で交差させるように約1cmの突帯を十字（前後左右）に貼り付ける⁽²⁾。額部には幅約6.5cmの粘土板を巻き付けるように貼り付けており、頂部から十字に垂れる突帯はこの上にも伸びる。この額の鉢巻き状の表面には、左前頭部側のみ直弧文の施文が認められる。文様は、正方形の区画を斜交線で4等分し、その内部を3～6条の扇状の斜（弧）線からなる扇形の文様単位で充填する。鉢巻き部の左右側頭部側と背面側からは、帯状の粘土板が下に垂れる。そのうち左右のものは下端部がバチ状に広がることから、美豆良表現と考えられる。背面側のものは直線的に末広がりになる。

顔面は目と口をヘラ状工具でくり抜いている。目は切れ長で吊り目。鼻は鼻筋が真っ直ぐと伸び、下端は「山」字状に開く。鼻孔表現はない。また、鼻筋から伸びるように眉部を粘土の段差で表現する。耳の実表現はない。顎は粘土を尖らせるように整形して表現する。また、顔面には額部と同じ直弧文による施文がある。施文は右頬部、鼻背左側～左頬～こめかみ、口下（顎）におよぶ。施文範囲は左右非対称だが、鼻先～目頭～頬～口角を結ぶ区画は左右で共通する。顔面左側の施文はこの区画に加えて、鼻背側部と目下～こめかみに広がる。細かい施文パターンは額のそれとほぼ同じで、数条からなる斜（弧）線の単位を斜めに配置して充填する。顎にも左右の口角から左側顎先にかけて施文される。

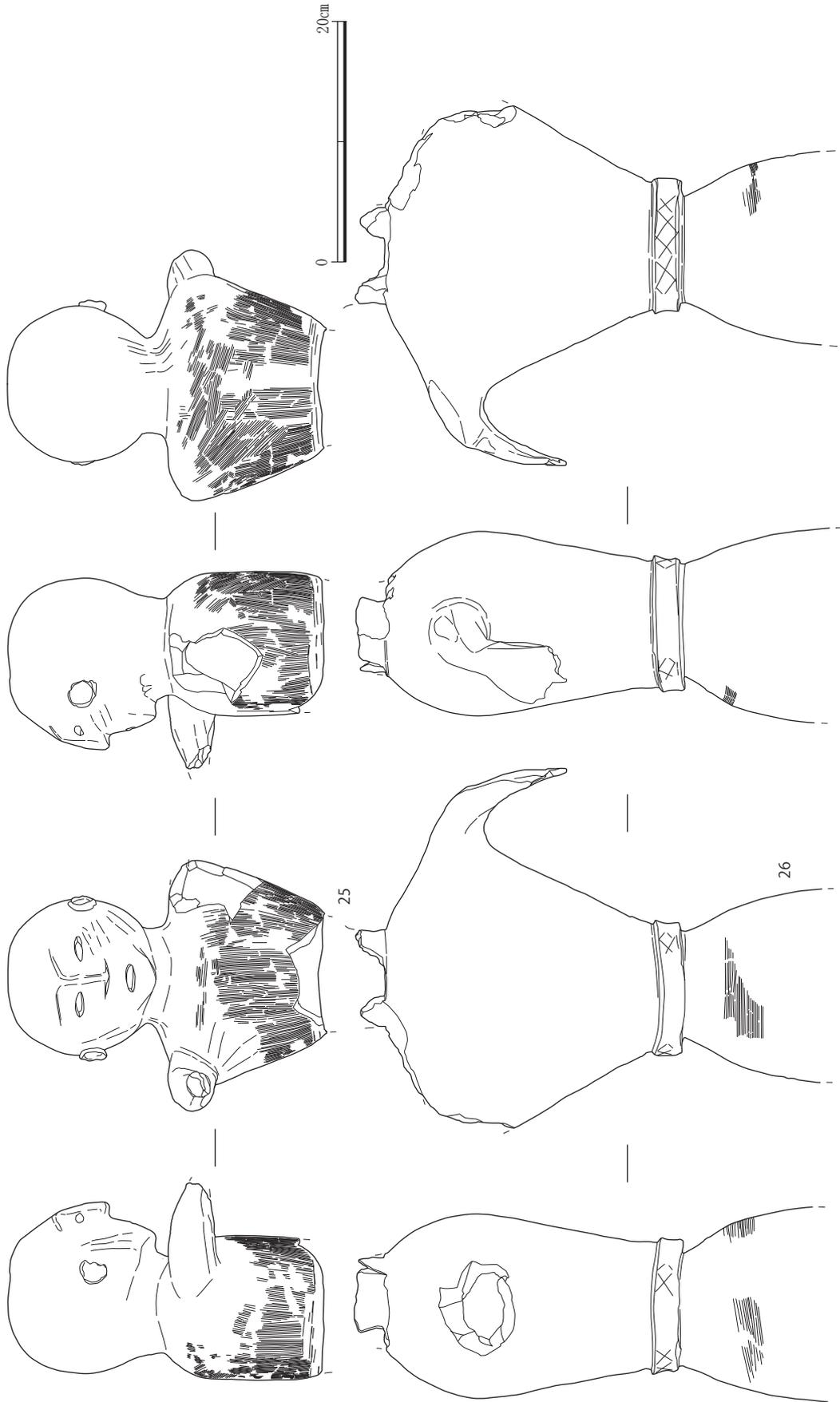


図7 堀切7号墳出土人物埴輪(3) (S=1/5)

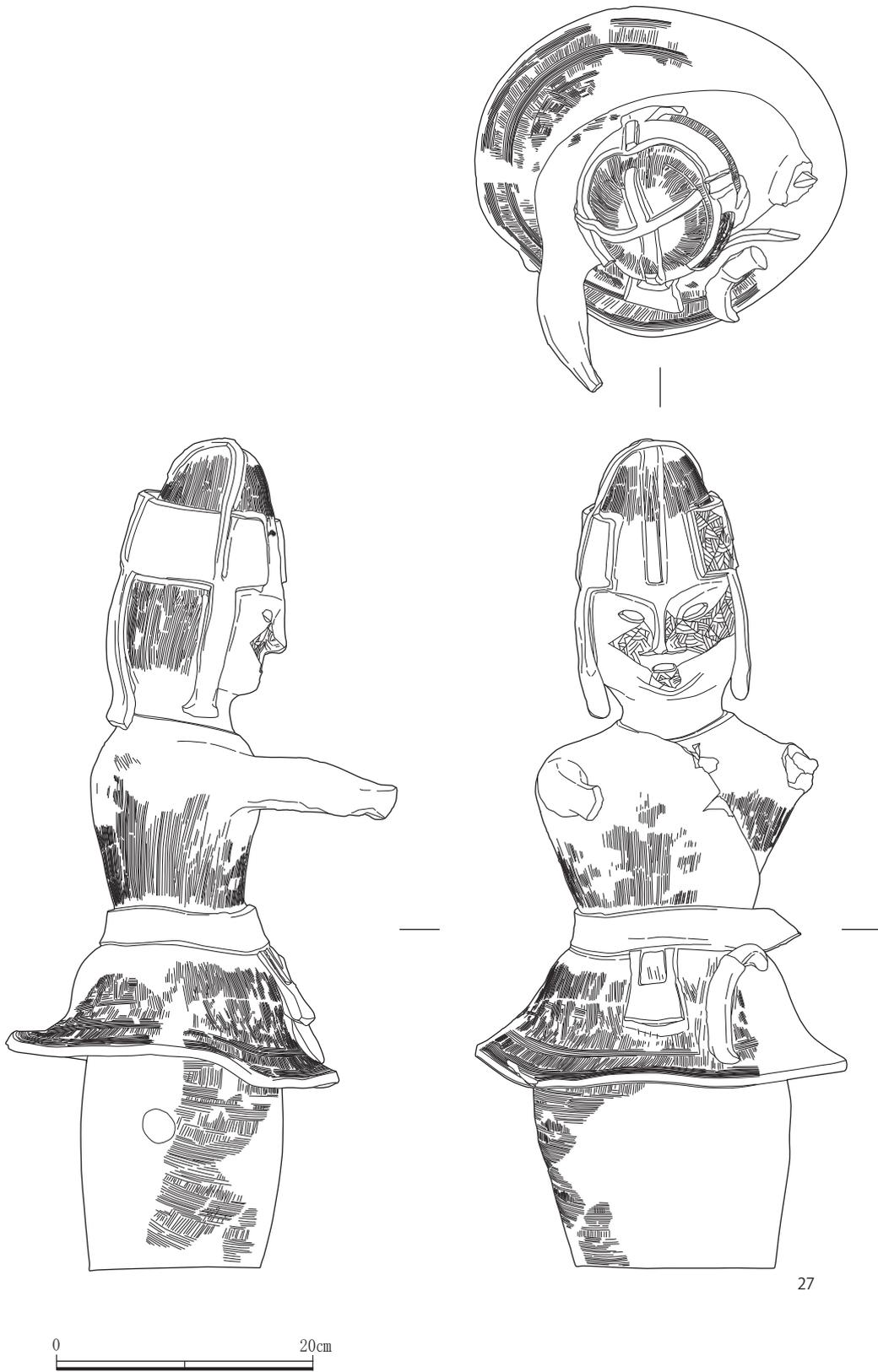


图8 堀切7号墳出土人物埴輪(1) (S=1/5)

体部は衣服を（向かって）左前に合わせる。衣服には装飾や文様はなく、外面にはタテハケによる調整痕が残る。左腕は肩から、右腕は手首付近から先で欠損している。左腕の欠損部の観察から、腕の付け根の空洞に、棒状の粘土を差し込む「中実技法」で成形しているようである。右腕は前方に突き出し、手首付近で内側にひねる。腰には幅5cm程度の粘土帯を巻き付け、帯（ベルト）を表現する。帯は右端部が前に来るように巻き付け、先端は山状に尖る。表面に装飾や施文はない。

帯の下はスカート状に開く衣服を表現する。草摺のような表現はなく、外面はハケで調整する。スカート下方から順にタテハケ→ヨコハケ→タテハケの順に調整しているようである。そのうちヨコハケは回転性が強い。また、スカートの内側にも回転ヨコハケが施されており、正位での成形では内面にこうしたヨコハケが施し得ないことから、朝顔形埴輪の口縁のように成形し、内外面を調整した後に倒立させて上半身を作った可能性がある。

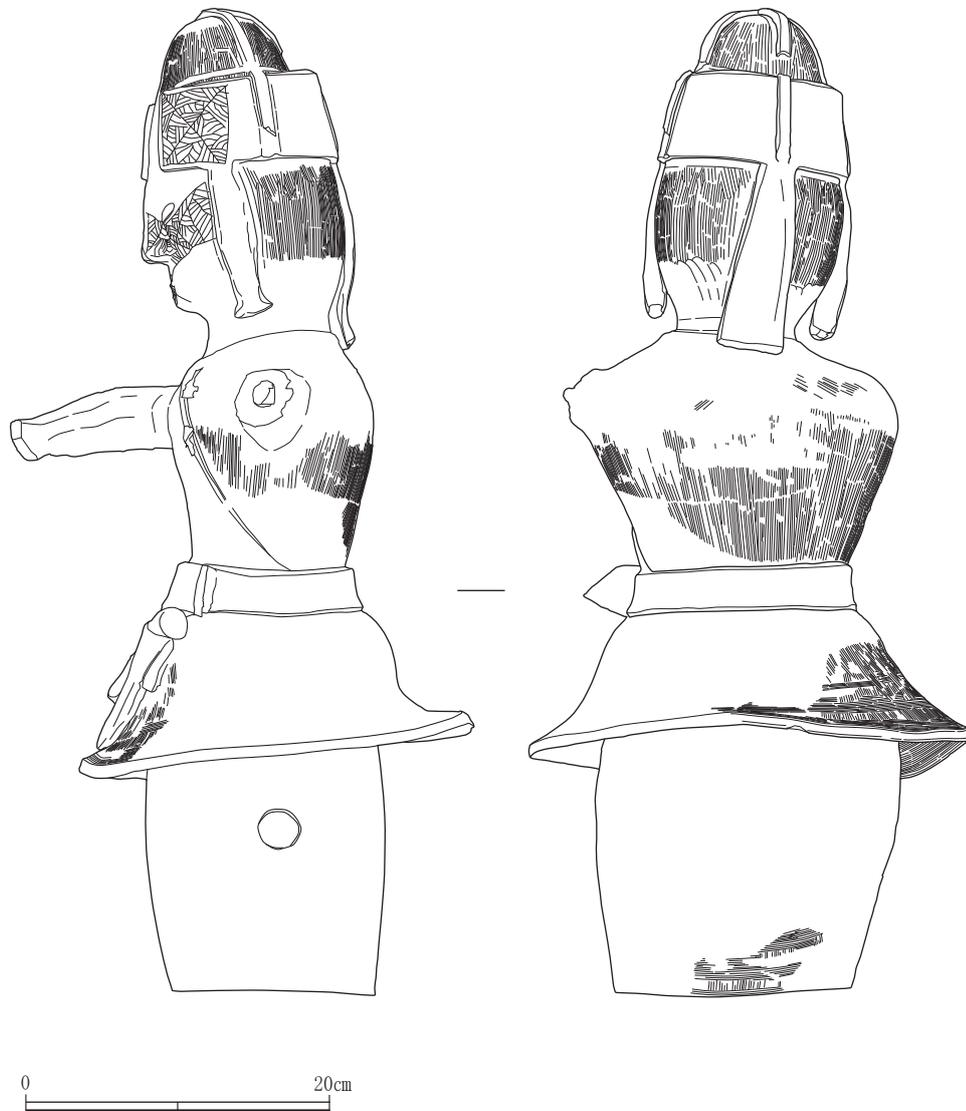


図9 堀切7号墳出土人物埴輪（2）（S=1/5）

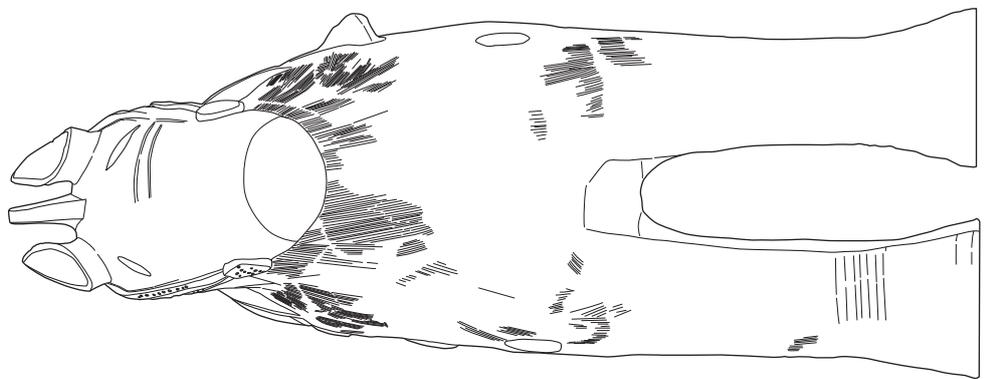
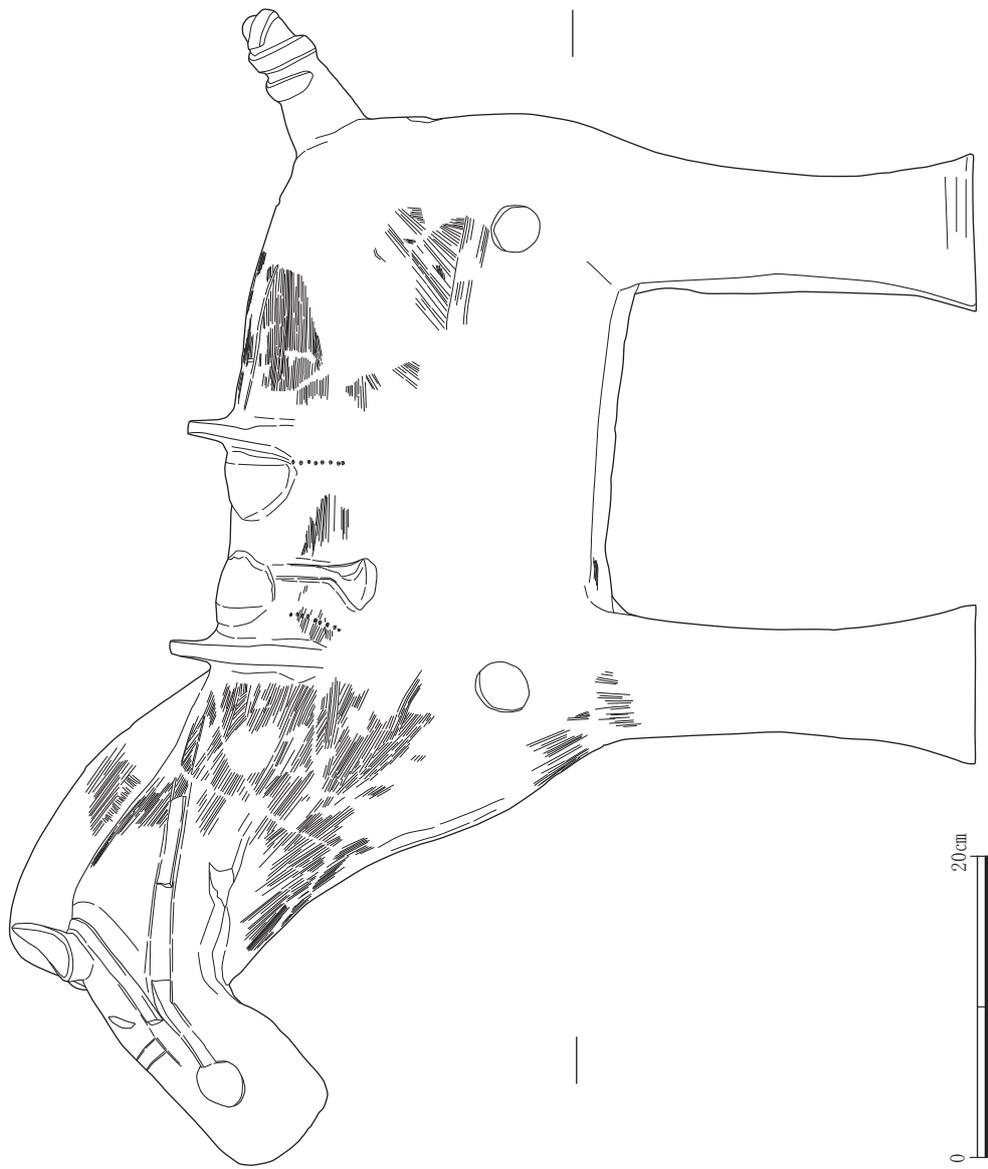


图 10 掘切 7 号墳出土馬形埴輪 (1) (S=1/5)

28

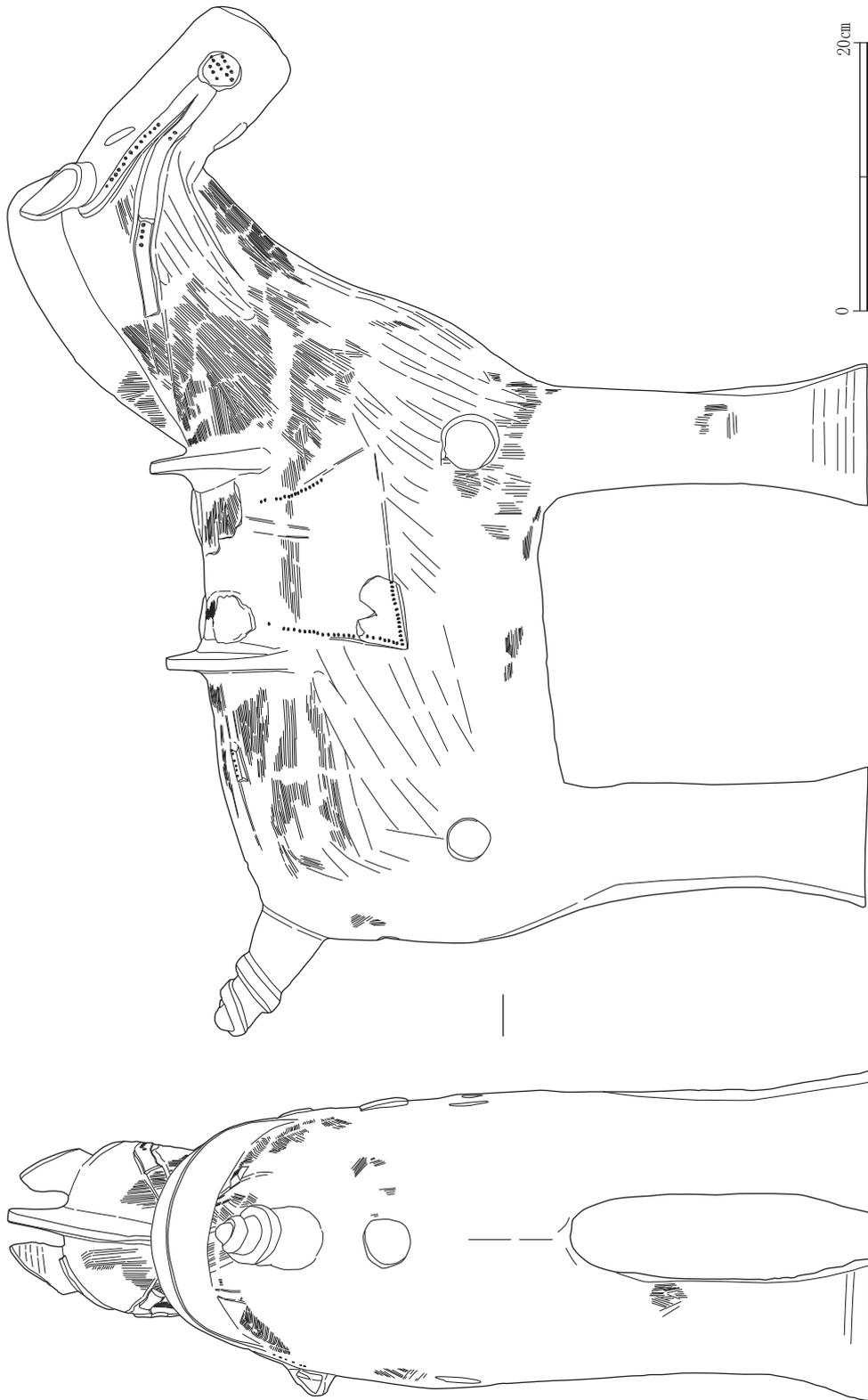


図11 堀切7号墳出土馬形埴輪(2) (S=1/5)

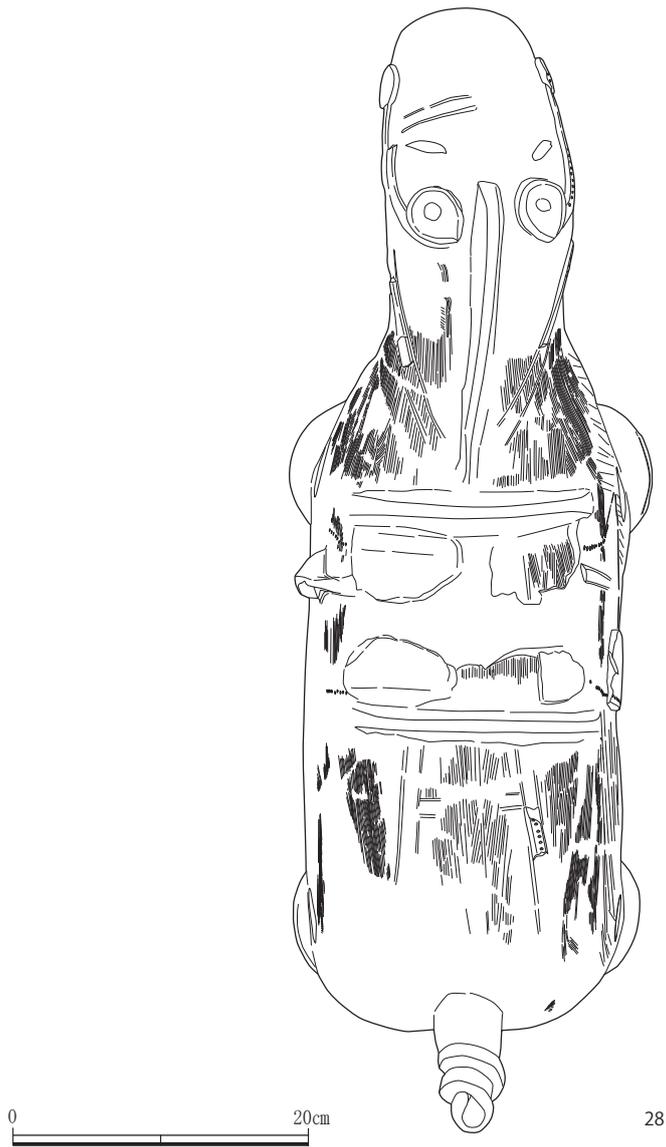


图 12 堀切7号墳出土馬形埴輪 (3) (S=1/5)

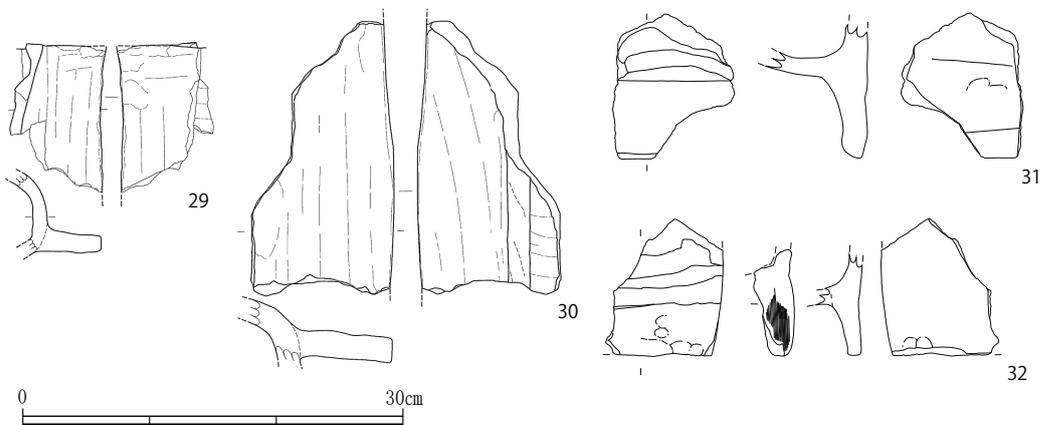


图 13 堀切7号墳出土「鞍状埴輪」(S=1/6) (辻川 2021、小林 2022 に加筆)

左腰には刀（刀子）を佩く。刃先が身体の内側を向き、切っ先がほぼ真下を向く。柄頭は小口部が刀棟側に広がる。鏝表現はなく、段差によって鞘と柄の境界を表現する。刀身は「へ」の字状に反り、切っ先はやや尖らせる。この刀（刀子）は別作りした後に、本体になでつけるように取り付け、体部とのすき間に粘土を入れ込んで補強している。

腰正面には2本の紐でぶら下がるポシット状の鞆が付く。刀（刀子）と同じく、体部との空隙に粘土を入れ込んで補強する。

器台は径約15cmの円筒状で、左右側面には円形透孔が穿たれる。外面にはタテハケ後に回転性の強いヨコハケを施す。

28は馬形埴輪である。焼成は土師質で明褐色系を呈する。頭部は鼻先付近の前半部が欠損するが、全体的に極めて扁平に作られている。耳は先端を尖らせ、中空で頭部に取り付く。目は扁平な頭部の前面に穿孔され、切れ長で垂れ目な点が特徴的である。目と鼻の間と、側頭部から耳の後ろにかけて、突帯を貼り付けることで面繫を表現する。口元側面には、円形の粘土板を貼り付けて楕円形鏡板付轡を表している。鏡板から前輪にかけては突帯を貼り付けて手綱を表す。面繫・鏡板・手綱の外面には竹管状工具による施文がある。頭頂部から頸部にかけては、粘土板を鱗状に縦に貼り付けてたてがみを表現する。背には粘土板を前後に立て、前輪と後輪を作る。前輪と後輪の間には、粘土を薄く貼り付けて居木を表現する。前輪寄りの居木からは、左右それぞれに突帯で表された力革が垂れ下がる。鏡は杓子形壺鏡で、体全体に対して高い位置に垂れ下がっており、サイズも小さい。背面から体部側面にかけては、薄く粘土を貼り付けて障泥を表す。障泥は下方にかけてバチ状に開き、外縁に沿って竹管文が連続で施される。後輪から臀部にかけては突帯による尻繫がめぐり、後輪から3本の帯が伸び、途中で直交する方向の帯が一本交差する。尻繫の突帯上面にも竹管文が認められる。尻尾は、全形はわからないが、臀部から短く反り上がり、尾の毛を紐のようなもので束ねる表現があったと考えられる。脚部は真っ直ぐ立ち上がり、関節や蹄の表現はなく、先端付近がラッパ状に開く。体部の外面調整は、上半部や頸部は身体に沿ってハケ調整をおこない、下半部から脚部にかけてはナデで仕上げている。4本の脚の上部と、尻尾の下部に1孔ずつ円形透孔が穿たれている。

他に、調査報告書で「鞍状埴輪」として報告された資料がある（図13-29・30）。これらの資料については、辻川哲朗氏がすでに検討を加えているため（辻川2021）、詳細な報告は控えるが、横断面が楕円形を呈する体部に鱗状の粘土板が取り付くという特徴的な破片を含む。鞍形埴輪にも類似するが、辻川氏はこれらを「鱗付楕円筒形土製品」に比定している。また、これらの資料については、7号墳の南東方に位置する5号横穴で出土した「陶棺片」（図13-31・32）と同一個体である可能性が高いことも指摘されている（小林2022）。

4. 堀切7号墳出土埴輪の位置づけ

(1) 特徴

堀切7号墳で出土した円筒埴輪の特徴をまとめると、以下のようになる。

規格・サイズ 2条3段のものと3条4段以上のものがある。前者は口径が約35cm、器高約50cmで、2段目に円形透孔が穿たれる。後者は口径が約30cm前後かそれ未満、上から3・4段目に直交配置で円形透孔が穿たれる。

割付 口縁部高は約 15cmのものと 10～11cmのものが認められる。突帯間隔は 8～12cm とややバラつきがあるが、大きく 11～12cmと 8～9cmにまとまりが認められる。底部高は 24.6cmのものと 26.0cmのものがある。

調整 外面調整はいずれも 1次調整タテハケ後に回転性の強いヨコハケを施す。内面調整には、ハケで仕上げるものとナデで仕上げるものがある。

突帯 いずれも突帯の上下の角が鋭く、中央が凹線状に凹むことで、断面が M 字状を呈する。

成形技法 断面や内面の観察から、粘土紐接合の傾きが上下で逆転する箇所が認められる。この特徴から、途中まで成形した底部を倒立し、その上部に粘土紐を積み完成させるという二分割倒立技法が用いられたことがわかる。倒立位置は、上から 1 条目の突帯の下部付近に多く認められる。

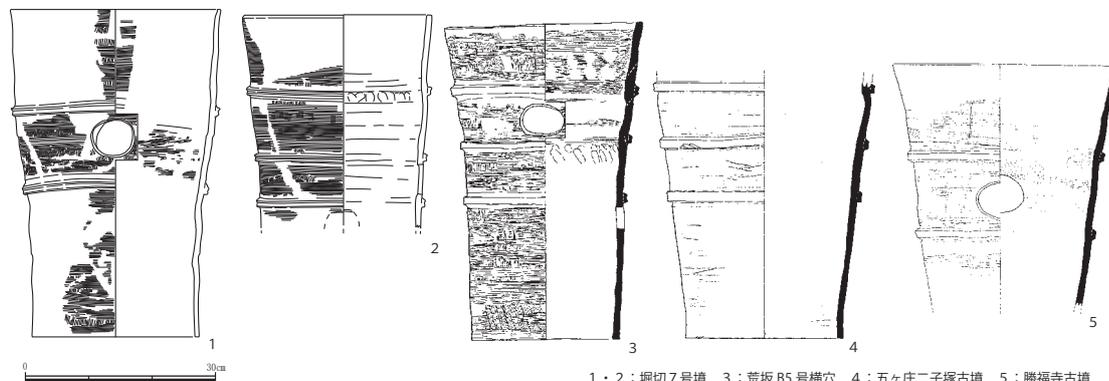
(2) 尾張系埴輪としての位置づけ

以上に挙げた特徴のうち、外面に回転性の強いヨコハケを施す点、二分割倒立技法を用いる点は、畿内で通有の特徴ではなく、後述する尾張系(型)埴輪⁽³⁾の特徴と共通するものである。加えて、人物埴輪にも外面に回転ヨコハケが施されており、尾張系埴輪にみられる技法が形象埴輪にも認められる点も大きな特徴である⁽⁴⁾。これらの特徴についてはすでに多くの検討が加えられており、堀切7号墳の埴輪は畿内における尾張系埴輪の一例として研究の俎上にあげられてきた。以下では、既往の研究を参考にしながら、今回の再整理の成果を踏まえた堀切7号墳出土埴輪の位置づけについて再確認してみたい。

①類例

まず、畿内における尾張型・尾張系埴輪の主な出土例をみていく(図14)。

京都府宇治市五ヶ庄二子塚古墳(前方後円墳/112m) 4条5段以上に復元される尾張系埴輪が出土している。焼成が須恵質で青灰色を呈するものと、土師質で橙色を呈するものが存在する。口径約35cm、底径約25cm。割付は、底部高約23cm、突帯間隔8～9cm、口縁部高約9.5cm。外面調整はタテハケ後に回転性の強いヨコハケを施す。突帯は上下の角が鋭く突出し、中央が大きく凹む断面M字状を呈する。下から2段目外面と下から2条目の突帯下部にはヒモズレ痕が残る。また、底部から3段目(高さ約38cm)に外面が外方に膨らむ部分があり、この付近が倒立位置である可能性が高い。なお、これらの尾張系埴輪のほかに、突帯に断続ナ



1・2：堀切7号墳 3：荒坂B5号横穴 4：五ヶ庄二子塚古墳 5：勝福寺古墳

図14 畿内における尾張系(型)埴輪(S=1/12)

デを施す畿内で通有の埴輪も相伴している。

京都府八幡市荒坂 B5 号横穴 3 条 4 段の全形が復元される尾張系埴輪が前庭部・羨道で出土した⁽⁵⁾。器高約 50cm、口径約 30cm、底径約 20cm。割付は、底部高 21.5～23cm、突帯間隔 9～10cm、口縁部高 8.5～10cm。焼成は硬質で灰褐色を呈する。円形透孔を上から 2・4 段目に穿つものと、3・4 段目に穿つものがある。外面調整はタテハケ後に回転性の強いヨコハケを施し、内面にもハケを多用する。突帯は上下の角が鋭く突出し、中央が大きく凹む断面 M 字状を呈する。下から 1 条目の突帯上面付近には平行タタキが施されており、この付近が倒立位置である可能性が高い。

兵庫県川西市勝福寺古墳（前方後円墳 /40 m） 2 条 3 段の尾張型埴輪が出土した。器高約 44cm に復元され、口径は 25～35cm、底径約 20cm。割付は、底部高約 18cm、突帯間隔約 12cm、口縁部高約 14cm。円形透孔を 2 段目に穿つ。外面調整はタテハケ後に回転性の強いヨコハケを施す。体部外面にはユビズレ・ヒモズレが、底部の内外面にはヘラ削りが認められる。なお、相伴した形象埴輪は畿内に通有の技法・形態をとる。

その他、全容はわからないものの、垣籠遺跡、柿田西 2 号墳（以上滋賀県長浜市）、物集車塚古墳（京都府向日市）、福井遺跡（大阪府茨木市）、額田部狐塚古墳（奈良県大和郡山市）などで尾張系（型）埴輪が認められている。

②尾張系（型）埴輪の展開と堀切 7 号墳出土埴輪の位置づけ

これら畿内出土の尾張系（型）埴輪のうち、勝福寺古墳例は唯一小型品で⁽⁶⁾、かつ尾張地域の埴輪の特徴をすべて兼ね備える尾張型埴輪そのものといえ、尾張地域の埴輪製作者による直接的関与が想定されている（東影 2006）。一方、堀切 7 号墳や五ヶ庄二子塚古墳、荒坂 B5 号横穴の例は、いずれも大型品で、尾張型特有の属性に変容あるいは欠如が認められることから、尾張系埴輪と捉えられる。

では、堀切 7 号墳でも出土している大型品を中心に比較してみると、外面調整の回転ヨコハケや、二分割倒立技法といった尾張系（型）埴輪に特徴的な属性の他に、いくつかの共通点が認められる。まず、突帯割付をみていくと、底部高 23cm 前後、突帯間隔 9cm 前後、口縁部高 10cm 前後という規格で共通する個体が多いことがわかる。堀切 7 号墳出土埴輪の割付間隔については、上述したようにややばらつきはあるが、他古墳における規格をある程度志向しているとみてよかろう。また、3 条 4 段以上に復元される個体については底部高や段数構成が不明なものの、これらが全体 3 条 4 段で、かつ底部高が他古墳と同じ約 23cm であると想定すれば、全体の器高が約 50cm となり、全形のわかる荒坂 B 号横穴出土埴輪と高さがほぼ揃う。また、堀切 7 号墳の 2 条 3 段の埴輪（1・2・5）には異なる規格が用いられているが、全体として器高が約 50cm で、3 条 4 段のものと高さが揃うことになる。やや推測を重ねたが、このように考えれば、堀切 7 号墳の埴輪生産においては、異なる段数構成をとりながらも、全体の高さを揃えていた可能性が高い。この他にも、土師質焼成で橙色系の色調を呈するものと、須恵質焼成で灰褐色系の色調を呈するものが存在することも複数の古墳で共通している⁽⁷⁾。さらにいえば、堀切 7 号墳の埴輪（5）にみられる、透孔横から伸びる「=」状のヘラ記号は、荒坂 B5 号横穴出土例にも同じものがみられ、強い関連性を示唆する⁽⁸⁾。

一方で、これらの例には相違点も多く認められる。五ヶ庄二子塚古墳例にみられるヒモズ

レ痕、荒坂 B5 号横穴例にみられるタタキ技法は、他の古墳には認められない要素である。また、これらの尾張系埴輪には、典型的な尾張型埴輪からの技法的変容もみられる。例えば、堀切 7 号墳の 2 条 3 段の埴輪には、二分割倒立技法が認められるが、本来この技法は、3 条 4 段以上の大型品にしか用いられない技法である。このことは、上述したように、堀切 7 号墳の 2 条 3 段の埴輪が 3 条 4 段以上の大型品と高さを揃えていた可能性が高く、2 条 3 段でありながらも大型品として捉えられるものであったことに起因するのだろう。また、五ヶ庄二子塚古墳例に認められるヒモズレは、通常 2 条 3 段の小型品に認められるものであり、3 条 4 段以上の大型品には通常認められない⁽⁹⁾。

このように、畿内における尾張系埴輪には強い共通性が認められる一方で、細かい各技法は古墳ごとに微妙に異なっている。こうした様相から、東影も想定するように（東影 2008）、特定の生産地を拠点に恒常的な生産供給をおこなっていたのではなく、古墳築造ごとに生産供給をおこなっていたと想定する方が自然である。東影は、古墳時代中期末の五ヶ庄二子塚古墳の築造を契機として淀川流域に尾張系埴輪が導入され、それ以降少しずつ各特徴が変容を遂げながら、各古墳で生産供給されたと想定する。翻って堀切 7 号墳の埴輪をみると、突帯割付の規格にややバラつきが生じていることや、ヒモズレやタタキが認められないこと、さらに形象埴輪の製作にも尾張系の工人が関与していることから、五ヶ庄二子塚古墳や勝福寺古墳に後出すると考えられる。このことから、堀切 7 号墳の築造は古墳時代後期中葉～後葉頃に比定できよう。以上のような相違点はあるものの、堀切 7 号墳出土例を含む尾張系埴輪どうしには多くの共通点があることは確かであり、これらの埴輪が同一系譜の工人集団によって製作されたことはほぼ間違いなからう⁽¹⁰⁾。

5. おわりに

ここまで、堀切 7 号墳出土埴輪の再整理の成果を提示するとともに、尾張系埴輪としての若干の評価をおこなった。すでにふれてきたように、畿内における尾張系埴輪の様相を示す好例として検討されてきた資料である。今回の再整理の成果が今後のさらなる研究の深化に繋がると期待したい。

謝辞

本報告作成にあたって、上野あさひ氏（京田辺市文化・スポーツ振興課）、大崎拳斗氏、柏木麻友子氏（宇治市歴史まちづくり推進課）、吉田芽依氏（八幡市文化財課）、和田一之輔氏（奈良文化財研究所）のほか、堀切古墳群発掘調査主任であった林正氏、京田辺市市史編さん室の皆さまには、多大なご協力を賜りました。末筆ながら厚くお礼申し上げます。

註

- (1) 後述するように、当古墳の円筒埴輪には倒立技法が用いられているため、破片資料では実際の天地の向きがわからないものが多い。今回、破片資料の場合は、内傾接合する向きを正位として図示した。
- (2) このような冠帽表現の類例として陵東遺跡（羽曳野市・藤井寺市）の男子埴輪がある。
- (3) 既往の研究では、ほかに「東海系」（梅本 2007）や「環畿内北東部型」（河内 2003、鐘方 2003）など

の呼称があるが、本稿では、尾張地域の埴輪の特徴を完備するものを尾張型埴輪、尾張型埴輪から影響を受けているものの、一部の属性に変容や欠如が認められるものを尾張系埴輪と呼称する（東影 2008）。尾張型埴輪の特徴には、外面調整の回転ヨコハケ、タタキ、底部内外面の回転削り、また小型品に認められる特徴としてユビズレ・ヒモズレ痕、底面の切り離し痕が、大型品に認められる特徴として2分割倒立技法が挙げられる（赤塚 1991 ほか）。

- (4) ハケメパターンを照合すると、形象埴輪と円筒埴輪で合致するものがあるため、同じ工人が製作したか、同一のハケ工具を用いて製作された可能性が高い。
- (5) 前庭部・羨道部で出土したが、当横穴に本来立てられたものではなく、外部から持ち込まれたものと考えられる（岩松ほか 2004）。また、近接する京田辺市松井の新田遺跡から、外面にタタキ痕を残す尾張系埴輪の破片が出土しており、関連性が注目される。
- (6) 柿田西2号埴例も2条3段の小型品である可能性がある。
- (7) 橙系（土師質）と灰褐色系（須恵質）の2タイプについては、同一個体内で部位により共存する例もあるため、焼き回りの具合による違いである可能性が高い。また梅本は尾張系（東海系）埴輪の製作者集団は、これらの色調や焼き上がりもこだわって同一のものを志向していたと考える（梅本 2007）。
- (8) 報告書番号の476・478の個体に認められる。
- (9) 東影は尾張地域で小型品を製作していた工人在、五ヶ庄二子塚古墳の大型品製作に携わったことによるものとする（東影 2008）。
- (10) 堀切7号墳の2条3段の埴輪と、尾張型埴輪である勝福寺古墳との共通点として、口縁部高・突帯間隔が一致すること、倒立位置の高さが一致する点が挙げられ、このことから、勝福寺古墳における製作者集団とも関連を有していたことが指摘されている（東影 2008）。

参考文献

- 赤塚次郎 1991 「尾張型埴輪について」『池下古墳』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第24集）
- 諫早直人・田口裕貴・菱田哲郎 2021 「京田辺市堀切古墳群の再検討（3）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科
- 諫早直人・藤川聖起・松田篤・高橋敦・加速器分析研究所 2023 「京田辺市堀切古墳群の再検討（4）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第9号 京都府立大学文学部歴史学科
- 諫早直人・守田悠・池田野々花・横白彩江・菱田哲郎・繰納民之 2023 「京田辺市堀切古墳群の再検討（5）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第9号 京都府立大学文学部歴史学科
- 岩松保ほか 2004 『女谷・荒坂横穴群』（京都府遺跡調査報告書第34冊）財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 宇治市教育委員会 1992 『五ヶ庄二子塚古墳発掘調査報告』
- 梅本康広 2007 「淀川流域の東海系埴輪とその製作動向」『埴輪論叢』第6号 埴輪検討会
- 岡田大雄・上村緑 2021 「京田辺市堀切古墳群の再検討（2）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科
- 鐘方正樹 2003 「円筒埴輪の地域性と工人の動向」『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 河内一浩 2003 「古墳時代後期における円筒形埴輪の研究動向と変遷」『埴輪論叢』第4号 埴輪検討会

小林楓 2022 「京田辺市出土陶棺および関連資料」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第8号 京都府立大学文学部歴史学科

田口裕貴・岡田大雄 2020 「京田辺市堀切古墳群の再検討（1）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第6号 京都府立大学文学部歴史学科

田辺町教育委員会 1989 『堀切古墳群調査報告書』（田辺町埋蔵文化財調査報告書第11集）

辻川哲朗 2021 「山城・堀切7号墳出土「靱状埴輪」の再検討」『滋賀県立大学考古学研究室論集Ⅰ 考古学研究室25周年・中井均先生退職記念』滋賀県立大学考古学研究室論集刊行会

東影悠 2006 「近畿地方における尾張型埴輪の様相」『川西市勝福寺古墳群発掘調査報告』川西市教育委員会

東影悠 2008 「尾張系埴輪の制作技術と生産体制」『橿原考古学研究所論集』第15 八木書店

東影悠 2023 「畿内における須恵器系埴輪の展開」『季刊考古学』第163号

附表1 堀切7号墳出土埴輪一覧

	器種	部位	器高(残存高)	口径	胴部径	底径	口縁部高	突帯間隔	底部高	口縁部	透孔	外面調整	内面調整
1	円筒埴輪	全形	52.0	35.0		27.0	15.3	12.6	24.6	外反	2段目	タテハケ→回転ヨコハケ	ハケ→ナデ
2	円筒埴輪	口縁部～胴部	37.1	36.0			14.7	11.1		やや外反	上2段目	タテハケ→回転ヨコハケ	ナデ
3	円筒埴輪	口縁部～胴部	37.0	29.7			11.4	10.3、7.0		直立	上2・3段目	タテハケ→回転ヨコハケ	ナデ
4	円筒埴輪	口縁部～胴部	34.0	32.8			9.6	9.2、8.6		直立	上2・3段目	タテハケ→回転ヨコハケ	ナデ
5	円筒埴輪	全形	50か				10.2	11.7	26.0	直立	2段目	タテハケ→回転ヨコハケ	ナデ
6	円筒埴輪	口縁部～胴部	14.7	33.0						外反		タテハケ→回転ヨコハケ	ハケ→ナデ
7	円筒埴輪	口縁部～胴部	12.4	33.0						直立		タテハケ→回転ヨコハケ	ナデ
8	円筒埴輪	口縁部～胴部	17.7	28.5			11.2			直立		タテハケ→回転ヨコハケ	ナデ(口縁部ハケ)
9	円筒埴輪	口縁部～胴部	26.5	24.5			11.0			外反	2段目	タテハケ→回転ヨコハケ	ナデ
10	円筒埴輪	口縁部～胴部	18.2	27.0			9.2			直立		タテハケ→回転ヨコハケ	ナデ
11	円筒埴輪	胴部	21.0		33.6			8.4			○	タテハケ→回転ヨコハケ	ナデ
12	円筒埴輪	胴部	22.1		33.8			10.0			○	タテハケ→回転ヨコハケ	ナデ
13	円筒埴輪	胴部	15.8		29.0			8.7			○	タテハケ→回転ヨコハケ	ナデ
14	円筒埴輪	胴部	17.9		30.4			8.5				タテハケ→回転ヨコハケ	ナデ
15	円筒埴輪	胴部	18.4		35.3			9.4				タテハケ→回転ヨコハケ	ナデ
16	円筒埴輪	胴部	20.2		25.1			10.7				タテハケ→回転ヨコハケ	ナデ
17	円筒埴輪	胴部	18.4		25.3						○	タテハケ→回転ヨコハケ	ナデ
18	円筒埴輪	胴部	18.7		28.7						○	タテハケ→回転ヨコハケ	ハケ→ナデ
19	円筒埴輪	胴部	13.8		30.0							タテハケ→回転ヨコハケ	ハケ→ナデ
20	円筒埴輪	胴部	13.4		29.4							タテハケ→回転ヨコハケ	ナデ
21	円筒埴輪	胴部	10.7		25.6							タテハケ→回転ヨコハケ	ナデ
22	円筒埴輪	胴部	8.7		27.3							タテハケ→回転ヨコハケ	ハケ→ナデ
23	円筒埴輪	底部	20.2			33.5						タテハケ→回転ヨコハケ	ナデ
24	円筒埴輪	底部	12.9			30.0						タテハケ→回転ヨコハケ	ヨコナデ
25	人物埴輪	頭部～胴部	16.3										
26	人物埴輪	頭部～胴部	33.7										
27	人物埴輪	全身	65.1										
28	馬形埴輪	全身	63?										
29	靱状埴輪?		11.6										
30	靱状埴輪?		21.6										
31	陶棺?		11.6										
32	陶棺?		10.8										

単位：cm

編集後記

余裕をもって仕事に取り組みたい。一つ仕事が終わる度に今度こそはと思うが、今回も果たせなかった。文字通りバタバタ。年末から長い師走が続いている。一つの救いは、春からのフィールドワークに始まり、冬の集報に終わるこの一連の営みが、10号を越え、府大歴史学科の伝統として根付きつつあること。フィールドをご提供いただいた関係各所のご厚意に深く感謝申し上げたい。

なお本書の組版作業は、歴史学科文化遺産学コースの合同実習メニューとして学部生がAdobe社のInDesignを利用しておこなっているが、もちろんそのままでは本にはならない。一書にまとめるにあたって力を尽くしてくれた大学院生の頑張りにも深く感謝したい。(い)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第11号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5

発行日 2025年3月31日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町38-2
